

ごっこ遊び（ままごと）の役割選択の規定因

—愛玩の対象となる役を選択したがる子どもの特性—

藤 木 大 介*

The Factor in the Selection of the Role in Playing House:
The Feature of Children Who Want to Play Babies or Pets

Daisuke FUJIKI

Various factors are involved in role selection for children while playing house. For example, children can play roles if they have certain models for them. In addition, they want to play the role that they want to be in the future. Presently, however, the number of children who want to play petted roles (e.g., cat, dog, and baby) is increasing. To discuss the cause of this change in children's preferences, we investigate whether they want to play the petted roles if they have a cat, dog, or a younger brother or sister as a model. In addition, we investigate whether children who are often scolded want to be a cat, dog, or baby because they are always petted, and want to play these roles. As a result, we found that the children evaluated as "difficult children" by the nursery teacher wanted to play petted roles.

Key words: play, playing house, difficult children

問題と目的

子どもは遊びを通して成長する。特にごっこ遊びは幼児期に頻繁に見られる遊びの1つである。

ごっこ遊び（ままごと）は家族や家庭生活についての遅延模倣の1つである（岡野，1996）。実際，岡野（1996）は，保育所の子どもと比較して児童養護施設の子どものは，模倣のモデルが少ないためままごと遊び自体が少なく，行われているままごと遊びについても，家族呼称（お父さん，お母さん等）の使用が少ない，役割設定や状況の確認がほとんど行われぬ，他者とのやりとりがほとんど見られない等の特徴が見られると報告している。つまり，家庭生活の経験の差がごっこ遊びの差を生んでいるということである。

子どもたちは，ごっこ遊びの中の役割行為を通して現実の経験では満たされない願望や，消失されない感情を表出している（武藤，2006；武藤・吉川，1997）。子どもたちはヒーローやお姫様などの架空の役になりきることを通してカタルシスを経験していると考えられる。また，ごっこ遊びは現実の大人の生活・活動に対する憧れが主要なテーマとなることが多く，憧れている人の役割を遊びの世界であることが次の発達の契機となる。しかし，憧れの対象と一般的にいわれる役を演じる子どもばかりではない。特に，武藤（2006），武藤・吉川（1997）は，近年，ごっこ遊びの中に猫ごっこなどペット遊びが現れるようになってきており，ままごとの中にもペット役が現れていると指摘している。同様に横山（2005，2006）も，ままごと遊びで母親役よりペット役をしたがる子どもが多くなったと指摘し，実際にペットを主役にした遊びが盛んに行われていると述べている。

ごっこ遊びの中の役割について，岡野（1996）は，

* 愛知教育大学
(Aichi University of Education)

その観察結果から、「お母さん役」は中心人物で最も人気が高いこと、「年寄り役」は不人気でこの役を割り当てられるとやる気がなくなること、「赤ん坊役」や「ペット役」は庇護を受ける対象で途中参加の場合に選択すると参加しやすいこと、を報告している。また、ペットはきちんと話したり、人の役に立つことをしなくても許され、少々いたづらをしても許される存在であり、ひたすら愛玩される役割でいつづけられる(武藤・吉川, 1997)。特に武藤(2006)、武藤・吉川(1997)は、子どもがこのような役割を演じることは、成長を急がされ「よい子」であることを求め続けられている子どもが成長を拒んでいる姿の表れであるとしている。

以上から、子どもにとってごっこ遊びは重要なものであり、その役割選択は子どもたちの願望を反映していると言えるだろう。特に、武藤(2006)や武藤・吉川(1997)、横山(2005, 2006)が指摘するように赤ちゃんやペット等、いわゆる憧れの対象ではなく、愛玩の対象となる役を演じる幼児が増えているという指摘は興味深い。このような変化が現れている原因を考えるため、愛玩対象の役を演じようとする幼児がどのような特性を備えているのかを実証的に検討する必要があるだろう。そこで本研究では、ままごとの役割選択に影響する要因にはどのようなものがあるかを検討する。

また以上の先行研究の知見から、ままごとの役割選択には、模倣のためのモデルの有無、および、どのような欲求を充足させるために演じるのか、という2つの要因が影響していると考えられる。特に、幼児が愛玩対象の役を演じたがると考えられる原因としては、例えば、自宅でペットを飼っている幼児は、模倣がしやすく、かつ愛玩されるペットをうらやましく感じ、ペット役を選択しやすいと予測される。同じように、弟や妹がいる幼児は模倣がしやすく、かわいがられることの多い弟や妹をうらやましく思い、赤ちゃん役を選択しやすいと予測される。他方、武藤(2006)、武藤・吉川(1997)にしたがえば、きょうだい間の比較により早く成長することを促されやすい兄や姉はペット役や赤ちゃん役を好むと予測される。また、叱られることの多いと考えられる「気になる子」、つまり「知的な発達には顕著な遅れは認められないにもかかわらず『落ち着きがない』『他児とのトラブルが多い』『自分の感情をうまくコントロールできない』などの行動特徴をもつ子ども(本郷, 2005, 2006)」はペット役など、愛玩される役を好むと予測される。以上の

予測に従い、ペットの有無、きょうだい構成、「気になる子」であるかどうか等の行動特徴について調べ、これらの特性が愛玩対象の役を好むことと関連しているのか検討することとした。

方法

対象者

増田・秋田(2002)は、4歳児を対象とした観察から、「役」の発生について「最初に役を宣言する」「同じ『役』を後から表明する」「『役』の交替を要求する」等のタイプ、役の成立については「宣言した『役』を成立させる」「能動的に『役』を変更する」「受け身的に『役』を変更する」「『役』についての調整案を出す」などのタイプがあることを指摘した。また、ごっこ遊びの発達の变化について高濱(1993)は、保育者1名と幼稚園児2名の年中～年長時の事例を観察し、①意図・プランの明確化、②プランの実現(相手への同調あるいはごく小さなプランの共有を経て2人の関係が成立し、テーマが出現)、③テーマの出現とプランの複合化(遊びのディテールを細部にわたって調整)、④プランの共有率の上昇(ものによる場面や状況の設定が簡略され、言葉で詳細に状況設定したり状況を描写したりし、しかもそれが容易に共有される)、⑤活動のオプション化(進行中の遊びの状況を表明できる)のように変化していくと整理している。また、横山(1994a, b, 1995)は、①見立て(3歳)、②役割の創造(4歳)、③遊びの構造化(5歳)のように発達するとしている。

以上から、役割が明確になると考えられる年中児、年長児を検討の対象とした。具体的には公立および私立保育所に通う幼児92名とその保護者、およびその保育士を調査対象とした。内訳は年中児47名(男児26名、女児21名)、年長児45名(男児27名、女児18名)であった。

手続き

幼児のままごとの役割選択を調べる方法としては、実際の自由遊び場면을観察する方法と、幼児に演じたい役を尋ねる方法とが考えられる。しかし、実際のままご場面演じる役は一緒に遊ぶ仲間との力関係等で必ずしも希望の役を演じることができるとは限らない。また、調査期間内に全ての幼児がごっこ遊びに興じるとも限らない。本研究の目的は、モデルの有無や欲求充足の必要性の有無が愛玩対象の役を演じた

いと思うか否かに影響するかを検討することである。このことを考えると、対象児の希望の役は何かを面接法によって尋ねる方が目的に即していると考えられる。一方で、実際にどのような役を演じたかに関する情報も、その幼児の社会的スキル等を推測する上で重要な情報であるとも考えられる。対象児はある程度正確なエピソード報告が可能な年齢であるということも考慮し(Uehara, 2000)、あわせて実際にどのような役を演じたかも尋ねることとした。

幼児への面接調査は保育室とは別の静かな部屋において担任保育士3名がそれぞれ個別に行った。幼児がごっこ遊び(ままごと)においてどの役を演じたいと思うかを調べるため、猫、犬、赤ちゃん、女兒、男児、女子児童、男子児童、女子中高生、男子中高生、お母さん、お父さん、おばあさん、おじいさんの絵を呈示しつつ、「ままごとをするとき、どれになりたい?」と尋ね、回答を記録した。絵刺激の呈示の仕方に関しては、その配置を無作為にする方法と固定する方法とがある。本研究では、幼児が複数の絵を比較して絵の示すものを理解して選択しやすいよう、図1(実際はカラー)のように猫からおじいさんの順で並べ、位置を固定して呈示した。このようにして幼児の希望の役を尋ねた上で、その理由を尋ねた。さらに、ままごとをやったことがあるかどうかを尋ね、やったことがあると応えた場合、前にままごとをやったとき

には何をしたかも尋ねた。

加えて、保護者に対しアンケート調査を行い、対象となった幼児の家族構成等についての情報を得た。また、ペットを飼っているか、そのペットは何か、等についても調べた。

さらに、保育士の回答により、対象児の行動特徴について評価した。具体的には、先に呈示した本郷(2005, 2006)の定義を各担任保育士に示し、これに基づいて「とても気になる」「少し気になる」「あまり気にならない」「全く気にならない」の中から選択し、また、特記すべき事項があれば記すよう求めた。

なお、調査時期は2011年1, 2月であった。また、本研究は西南女学院大学における倫理審査(2010年度第20号)を受け、実施された。

結果

基礎的なデータの報告

表1に各役毎に演じてみたいと答えた人数と、実際に演じた経験があると答えた人数を示した。特徴的なこととしては、祖父母、あるいは曾祖父母のいずれか1名以上と同居している幼児は24名いたにもかかわらず、おばあさん役、おじいさん役を演じてみたいと答えたり、実際に演じた経験があると答えたりすることは全くなかった。また、ままごとの経験がないと答

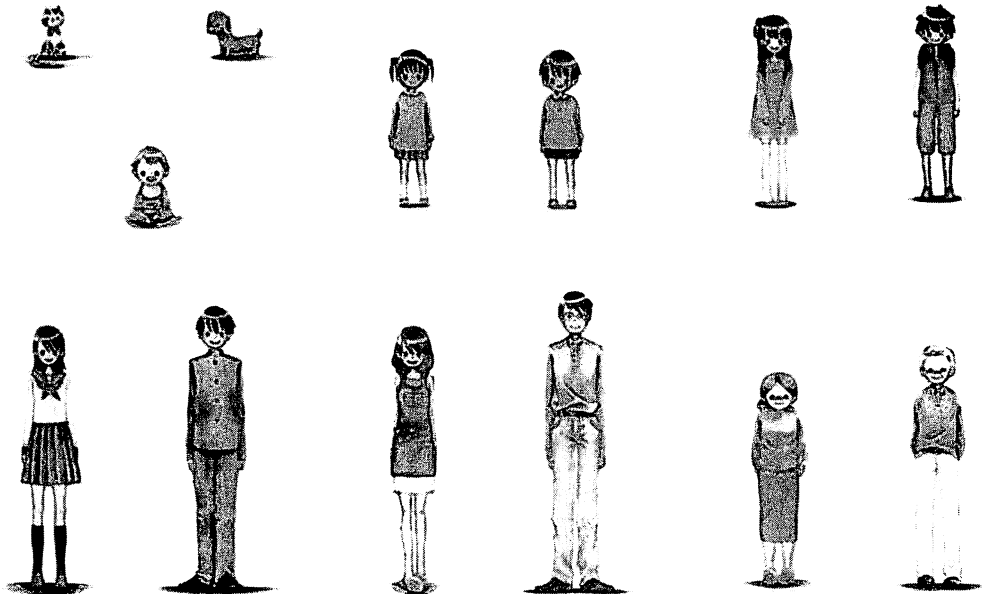


図1 ごっこの役の希望の選択のための絵刺激

表1 各役毎に演じてみたいと答えた人数と実際に演じた経験があると答えた人数

役	希望		経験	
	男児	女児	男児	女児
猫	0	3	4	2
犬	5	1	5	1
赤ちゃん	8	3	5	6
女児	0	5	1	3
男児	6	0	6	0
女子児童	0	8	0	10
男子児童	12	0	8	0
女子中高生	1	5	1	7
男子中高生	11	0	5	0
お母さん	1	14	1	8
お父さん	9	0	7	1
おばあさん	0	0	0	0
おじいさん	0	0	0	0
その他	—	—	6	0

えた幼児は5名であった。なお、希望の役と経験した役とが一致しているのは19名であり、内訳は赤ちゃん3名、女児1名、男児1名、女子児童4名、男子児童2名、男子中高生3名、お母さん4名、お父さん1名であった。

ペットの有無とままごとの役割選択

猫や犬を飼っているか否か毎にままごとにおいて猫や犬の役を希望したか否かを表2にまとめた。このクロス表に基づきフィッシャーの直接法による検定を行った結果、有意な偏りは認められなかった ($p=.68$)。したがって、猫や犬を飼っているか否かの違いが対象児が猫犬役を希望するか否かに影響を及ぼすとは言えない。

なお、対象児が猫や犬を演じたいとした理由について、複数の理由を述べた者もいたので延べ人数を報告すると、「かわいいから」が3名、「好きだから」が2名、「一緒に遊びたいから」が1名、「演じるのが上手だから」が2名、「飼っているから」が2名、「曖昧な理由(ニャンニャンって泣くから)」が1名であった。

同様に、猫や犬を飼っているか否か毎に、以前のままごとで猫や犬の役を演じたと回答したか否かを表3にまとめた。このクロス表に基づきフィッシャーの直接法による検定を行った結果、有意な偏りは認められなかった ($p=1.00$)。したがって、猫や犬を飼ってい

表2 ペット(猫犬)の有無と猫犬役希望(人)

	猫犬役	それ以外の役
ペット有り	1 (5.6)	17 (94.4)
ペット無し	8 (10.8)	66 (89.2)

(括弧内は行毎の%)

表3 ペット(猫犬)の有無と猫犬役経験(人)

	猫犬役	それ以外の役
ペット有り	2 (11.1)	16 (88.9)
ペット無し	10 (14.5)	59 (85.5)

(括弧内は行毎の%)

表4 弟妹の有無と赤ちゃん役希望(人)

	赤ちゃん役	それ以外の役
弟妹有り	3 (9.1)	30 (90.9)
弟妹無し	8 (13.6)	51 (86.4)

(括弧内は行毎の%)

るか否かの違いが対象児が猫犬役を演じたことがあるか否かに影響を及ぼすとは言えない。

弟妹の有無とままごとの役割選択

弟や妹がいるか否か毎にままごとにおいて赤ちゃんの役を希望したか否かを表4にまとめた。このクロス表に基づきフィッシャーの直接法による検定を行った結果、有意な偏りは認められなかった ($p=.74$)。したがって、弟や妹がいるか否かの違いが対象児が赤ちゃん役を希望するか否かに影響を及ぼすとは言えない。

なお、対象児が赤ちゃんを演じたいとした理由については、「かわいいから」が4名、「優しくしてもらえるから」が3名、「演じるのが上手いから」が1名、「わからない」が2名「意味不明(時間がひっくり返ると赤ちゃんになるから)」が1名であった。

同様に、弟や妹がいるか否か毎に、以前のままごとで赤ちゃん役を演じたと回答したか否かを表5にまとめた。このクロス表に基づきフィッシャーの直接法による検定を行った結果、有意な偏りは認められなかった ($p=1.00$)。したがって、弟や妹がいるか否かの違いが対象児が赤ちゃん役を演じたことがあるか否かに影響を及ぼすとは言えない。

表5 弟妹の有無と赤ちゃん役経験（人）

	赤ちゃん役	それ以外の役
弟妹有り	4 (12.5)	28 (87.5)
弟妹無し	7 (12.7)	48 (87.3)

(括弧内は行毎の%)

表8 対象児の行動特徴毎の対象児の役希望（人）

	愛玩対象の役	それ以外の役
とても気になる	8	10
少し気になる	4	16
あまり気にならない	4	20
全く気にならない	4	26

表6 きょうだいの構成毎の対象児の役希望（人）

	愛玩対象の役	それ以外の役
単独子	5 (26.3)	14 (73.7)
長子	5 (26.3)	14 (73.7)
末子	7 (17.5)	33 (82.5)
中間子	3 (21.4)	11 (78.6)

(括弧内は行毎の%)

表9 対象児の行動特徴毎の対象児の役経験（人）

	愛玩対象の役	それ以外の役
とても気になる	5	12
少し気になる	5	15
あまり気にならない	8	15
全く気にならない	5	22

表7 きょうだいの構成毎の対象児の役経験（人）

	愛玩対象の役	それ以外の役
単独子	8*(53.3)	7*(46.7)
長子	4 (21.1)	15 (78.9)
末子	8 (20.0)	32 (80.0)
中間子	3 (23.1)	10 (76.9)

(括弧内は行毎の%, *は残差分析で有意)

否かを規定するかを検討するため、まず、保育者の対象児の評価について「とても気になる」を3、「少し気になる」を2、「あまり気にならない」を1、「全く気にならない」を0と換算した。また、対象児を愛玩対象の役を希望したのか、それ以外の役を希望したのかで2群に分けた(表8)。その上で、保育者の対象児の評価を説明変数、対象児の2群を目的変数とする判別分析を行った。その結果、正準相関係数は.24、標準化されたWilksのλは.94 ($p < .05$)であり、正判別率は63.0%であった。したがって、対象児の行動特徴は愛玩対象の役を演じてみたいか否かを十分に区別すると言える。保育者が気になると評定するほど愛玩対象の役を演じてみたい子である傾向があるといえる。

一方、対象児の行動特徴が実際に愛玩対象の役を演じているか否かを規定するかを検討するため、対象児を愛玩対象の役を演じたかと回答したか、それ以外の役を演じたかと回答したかの2群に分け(表9)、判別分析を行った。その結果、正準相関係数は.04、標準化されたWilksのλは.99 ($p > .05$)であり、正判別率は52.9%であった。したがって、対象児の行動特徴は愛玩対象の役を演じているか否かを十分には区別しないと言える。

なお、保育士による全対象児の行動特徴の評定の平均は1.28 ($SD=1.12$)であった。

きょうだい構成とままごとの役割選択

きょうだい構成の違い毎に、対象児が愛玩対象の役(猫、犬、赤ちゃん)を希望したのか、それ以外の役を希望したのかを表6にまとめた。このクロス表に基づきカイ二乗検定を行った結果、有意な偏りは認められなかった($\chi^2(3)=0.89, ns$)。したがって、きょうだいの構成の違いが対象児が愛玩対象の役を希望するか否か等に影響を及ぼすとは言えない。

同様に、きょうだい構成の違い毎に、以前のままごとで愛玩対象の役を演じたかと回答したのか、それ以外の役を演じたかと回答したのかを表7にまとめた。このクロス表に基づきカイ二乗検定を行った結果、有意な偏りの傾向が認められた($\chi^2(3)=6.79, p < .10$)。残差分析の結果、単独子が愛玩対象の役を演じた数が有意に多く、一方、単独子が愛玩対象でない役を演じた数が有意に少ないことが分かった。

対象児の行動特徴とままごとの役割選択

対象児の行動特徴が愛玩対象の役を演じてみたいか

考 察

本研究では、ペットの有無、弟妹の有無、きょうだい構成、幼児の行動特徴がままごとの役割選択に影響を及ぼすかを検討した。

ペットの有無の影響に関しては、ペットを飼っている家庭の対象児はペットの模倣がしやすく、また、愛玩されるペットをうらやましいと思ひ、ペット役を演じるのではないかと予測した。しかし、猫や犬を飼っているか否かがままごとの役割選択に影響を及ぼすということは示されなかった。この結果からはペットの有無とままごとで猫や犬を演じることに関連は見いだせない。

弟妹の有無に関しては、弟妹がいる家庭の対象児は赤ちゃんの模倣がしやすく、また、かわいがられることの多い弟妹をうらやましいと思ひ、赤ちゃん役を演じるのではないかと予測した。しかし、弟妹がいるか否かがままごとの役割選択に影響を及ぼすということは示されなかった。この結果からは弟妹の有無とままごとで赤ちゃん役を演じることに関連は見いだせない。

一方、きょうだい構成の影響に関しては、長子は弟や妹と比較され、また、早く成長することを促されやすいため、成長を急がされない赤ちゃんやペットという愛玩対象の役を演じたがるのではないかと予測した。しかし、この予測とは異なり、単独子が愛玩対象の役を演じた経験を多く報告するという結果であった。

単独子が愛玩対象の役を演じたことがあると報告した理由を考えるためには、何が単独子に特有であるかを考える必要があるだろう。単独子は長子、中間子、末子とは異なり、きょうだいがいない。そのため、きょうだいが欲しいという気持ちから赤ちゃん役を希望することが多く、全体として愛玩対象の役を希望する人数が多くなった可能性がある。そこで、きょうだい構成毎に愛玩対象の役を演じたと報告した対象児の中で赤ちゃん役を演じたと報告した人数を集計すると、単独子8人中4人、長子4人中2人、末子8人中4人、中間子3人中1人であり、偏りは認められない。したがって、単独子のみがきょうだいへの憧れをもち、赤ちゃん役を多く演じたという解釈は成り立たない。

また、きょうだいがいないことで生じる影響としては、家庭内にきょうだいがいないため、社会的スキルが劣り、叱られることが多く、愛玩対象の役を演じて

いたということも考えられる。これは、きょうだい構成と「気になる子」であるか否かが部分的に交絡していた可能性があるということでもある。そこで、きょうだい構成の種類毎の「気になる子」の評定値の平均を調べると、単独子が1.37 ($SD=1.16$)、長子が1.47 ($SD=1.12$)、末子が0.98 ($SD=1.05$)、中間子が1.79 ($SD=1.12$)であった。これらに差があるかを検定するため分散分析を行った。その結果、主効果が有意傾向であった ($F(3, 91)=2.25, p<.10$)。主効果が有意傾向であったため、念のため下位検定として多重比較 (Bonferroni 法) を行ったところ、有意な差は認められなかった。また、評定値の平均から単独子が特に「気になる子」であるとも言えないだろう。したがって、単独子は社会的スキルに劣り、叱られないことを望んで愛玩対象の役を演じていたという解釈は成り立たないだろう。

その他、きょうだいがいないことで起こりうる事態としては、単独子は親の期待を一身に背負ってしまうという可能性である。この解釈は、本研究の元々の予測である、長子が早く成長することを促されることが多く、成長を急がされない赤ちゃんやペットの役を演じたがるという考え方と類似している。したがって、単独子は親の期待を受けすぎない愛玩対象の役を演じていた可能性は十分にありうるだろう。

最後に、幼児の行動特徴の影響に関しては、叱られることの多い「気になる子」は愛玩対象の役を演じたがると予測した。また、他児とのイメージの共有などが困難な「気になる子」は自由気ままに振る舞うことが許される愛玩対象の役を演じたがると予測した。そしてこの予測通り、保育士が「気になる子」と評価する対象児ほど愛玩対象の役を演じたがるということが分かった。一方で、保育士が「気になる子」と評価した対象児が実際には愛玩対象の役を演じているというわけではないことも分かった。

そもそも、「気になる子」は普段からままごとに参加しているのだろうか。どの程度の頻度でどの程度積極的に、どのくらいうまく参加しているのだろうか。本研究では、研究の目的に即し、幼児のままごとにおける願望の役や、幼児の記憶から経験した役について面接法による調査を行った。しかし、実際のままごとの様子は分からない。実際に自由遊び場面でのままごとを観察し、どのような幼児がどのくらいままごとを行い、どのような役割を演じ、どのくらいうまくか等を検討する必要があるだろう。そして、「気になる子」の社会性等を育むために、どのようにすればままごと

に参加できるかを考えることは有意義であろう。飯島(2008a, b)は、「気になる子」は、どのように振る舞えばよいかと比較的明確なルール遊びの方が、展開が一定ではないごっこ遊び等よりも参加しやすく、ルール遊びなどを通して保育者が働きかけていくことにより徐々に他児と遊びの内容の共有ができるようになる」と報告している。しかし、「気になる子」がごっこ遊びに参加したいと考えた場合、ペットや赤ちゃんの役は自由気ままに振る舞えるので参加が容易だとも考えられる。「気になる子」のままごとへの参加の援助と、参加の過程での社会的スキルの獲得過程等を観察し、報告することも有意義であろう。

本研究は、近年、赤ちゃんやペットといった愛玩対象の役を演じる子どもが増えているのではないかという指摘に基づき、愛玩対象の役を演じるためのモデルとしてペットや弟妹がいることで愛玩対象の役を演じたがるようになるのか、さらに、長子であることや保育士にとって「気になる子」であるため、成長を促されたり叱られたりすることが多く、愛玩の対象となりたいという欲求を充足するために愛玩対象の役を演じたがるようになるのかを検討した。その結果、長子ではないが単独子が愛玩対象の役を演じた経験があったとした人数が多い傾向があり、また、「気になる子」は愛玩対象の役をしたがることが分かった。したがって、本研究の結果はモデルの有無が規定因となることを支持するものではなかったと言える。この結果にはいくつかの説明が可能である。例えば、モデルがない場合はままごととは少なくなる(岡野, 1996)が、モデルがあるからといってそれを好んで演じるわけではない可能性がある。また、本研究で採用した面接法は、欲求充足を目的とした役割選択の選好の有無を検出するには十分な感度を有しているが、モデルの有無から生じる役割選択の選好の有無を検出するには十分な感度を有していない可能性もある。いずれにしろ、1つの調査で有意な結果が得られなかったことだけではモデルの有無が役割選択の規定因ではないとは結論できない。実際のままごと場面の観察等、さらに様々な方法で検討を重ねていく必要がある。

また、そもそもの話として、赤ちゃんやペットといった愛玩対象の役を演じる子どもが増えているという指摘自体も過去のデータと比較しなければ議論できない。しかし、その基準となるデータは見あたらない。そういった点で、本研究は今後子どもたちの役割選択の傾向が変化していくのかを検討していく上での基礎的資料としての意味も有している。

一方で、本研究にはいくつかの課題がある。本研究では、ペットの有無、弟妹の有無やきょうだい構成、対象児の行動特徴といった要因について、これらが役割選択に影響するかを検討した。しかし、実際にはこれらの要因が相互作用的に影響を及ぼす可能性も考えられる。つまり、ペットの有無、きょうだい構成、対象児の行動特徴の3つの要因が独立に作用すると暗黙に仮定して議論してきたが、相互作用を予測することも可能だということである。たとえば、これらの要因が相乗的に働いた場合に愛玩対象の役を希望したりする可能性も考えられる。しかしながら、多くの要因を同時に検討するためには、本研究のように対象児の人数を従属変数とする場合、多量のデータ数が必要になる。今後相互作用を検討するのであれば、より多くのデータを得る必要があるだろう。

また、方法論上の課題もある。1つ目は、ままごとの経験についての質問である。これは役割の希望についての質問を補足する目的で行ったものだった。そのため、対象児は直近のままごとや印象に残ったままごとについて回答するだろうという想定であった。しかし、厳密なデータを得るためには、どの時点でのままごとについて尋ねるかを定めた上で質問するべきであろう。2つ目は、本研究が想定しているままごとと、対象児が想定していたままごととが一致していたかという点である。どの対象児も役割を選択できたという点から考えれば、大きく想定が異なっていたとは考えにくい。しかし、厳密にはそれを確かめる術はない。今後は本研究の知見を基に、我々がままごとだと想定する遊びをしている子どもたちを観察するといった方法を加えていく必要があるだろう。3つ目は、そもそも対象児がままごと自体をどの程度やりたいと思っていたのかを確認していない点である。子どもたちの状況には様々なものがあると考えられる。ままごとをしたいと思っており希望通りの役をやれる子、ままごとをしたいとは思っているが希望通りの役はやれない子、ままごとをしたいとは思っているがままごとの輪に入っていけない子、ままごとをそれほどしたいわけではないが付き合いでやっている子、ままごとをやりたいとは思わず実際にやらない子、等である。本研究はままごとの役割選択の規定因を検討する研究としての端緒となるべく、網羅的にデータを採ることを優先した。しかし、今後は子どもたちがままごとをしたががっているか等が役割選択に影響を与えるのかも含めた検討が必要となるだろう。

また、本研究では保育所に通う幼児を対象とした調

査を行った。そのため、対象児の保護者の多くが就労していた。一方で、両親のいずれかが就労しておらず、主に家事を行っている場合、幼児はそれをモデルとし、父親や母親の役を演じたいと思うようになるかもしれない。このことを確かめるためには、幼稚園等に通う幼児を対象としたデータも追加し、親の就労状態と父親や母親の役を演じたいと思うかどうかとの関係を検討することも有意義であろう。

さらに、本研究はままごとの役割選択の規定因として先行研究から導かれる仮説のみを検討したが、実際にはこの他にも規定因となるものはあると考えられる。例えば、子どもの性別が挙げられるだろう¹⁾。ジェンダーに関心のある研究者は幼児の性とままごとにおける役との関係を検討することから何らかの示唆を得られるかもしれない。

注

- 1) このアイディアは2名の査読者から頂いた。

引用文献

- 本郷一夫 2005 「気になる」幼児とは 言語 34, 9, 42-49.
- 本郷一夫(編著) 2006 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応: 特別支援教育への接続 プレーン出版
- 飯島典子 2008a 「気になる」子どもの遊びの共有と社会性の発達: 遊びタイプの分類 発達研究 22, 151-162.
- 飯島典子 2008b 「気になる」子どもの遊びの成立を促す保育者の働きかけ 東北大学大学院教育学研究科研究年報 57, 1, 327-338.
- 増田時枝・秋田喜代美 2002 遊び開始時の「役」発生・成立スタイルの検討: 4歳児のごっこ遊びをとおして 保育学研究 40, 1, 75-82.
- 武藤安子 2006 人間関係発展の技法 金田利子・齋藤政子(編著) 保育内容・人間関係 同文書院 77-89.
- 武藤安子・吉川晴美 1997 保育者の臨床教育的アプローチ 武藤安子・吉川晴美(共編著) かかわりを育む保育学 203-214.
- 岡野雅子 1996 「ごっこ」遊びに現れた家族・家庭生活: 保育所児と養護施設児の観察から 日本家政学会誌 47, 5, 435-444.
- 高濱裕子 1993 幼児のプラン共有に保育者はどのようにかかわっているか 発達心理学研究 4, 1, 51-59.
- Uehara, I. 2000 *Differences in episodic memory between four- and five-year-olds: False information versus real experiences*. Psychological reports, 86, 3, 745-755.
- 横山文樹 1994a ごっこ遊びに関する実践的考察 教育情報科学(北海道教育大学) 22, 59-70.
- 横山文樹 1994b 実践場面におけるごっこ遊びの展開: 役割の成立過程 人文論究(北海道教育大学函館人文学会) 58, 181-190.
- 横山文樹 1995 ごっこ遊びの実践的考察: ごっこ遊びの意義と役割の成立 日本保育学会大会研究論文集 48, 854-855.
- 横山文樹 2005 ままごと遊びの再考①: ごっこ遊びの意義とままごと遊びの位置づけ 学苑(昭和女子大学近代文化研究所) 776, 114-123.
- 横山文樹 2006 ままごと遊びの再考②: 遊びのプロセスからの検証 学苑(昭和女子大学) 788, 62-73.

謝辞

本研究を行うにあたり、中間市立さくら保育園の山本友子先生、塚原順子先生、砂山保育園の小野村直美に多大なるご協力を頂きました。また、西南女学院大学の上村眞生先生をはじめとする「子ども福祉研究会」の皆様には多くのご助言等を頂きました。記して感謝いたします。